

一舟はかおといふ物をもつて、おそろしき浪をもしのぎ、あらしき風をもふせぎ、大海をもわたる也、人間界の人は、正直の心をもちて、あぶなき世をも、神佛のたすけわたし給ふ也。○中略

返々はづかしくおもひたてまつれども、いのちはさだまりてかぎりある事なれば、いつをそれともしりがたし、そのうへ時にのぞみてのありさま、有いは物をいはずしてはかなくなる人もあり、又弓矢によりて、此世をそむくたぐひもあり、露の命の生死、無常の風にしたがふならひ、其口はかりはかげろふのあるかなきかのふせい也、心におもひいだすをはからず申也、これをもちゐたらん程に、あしき事にて候はゞ、わろき事を親のたまひけるよと、其時おもひ給ふべし、是を持ゐたらんを、けうやうの至極と思ゐたてまつるべし、たゞにもちゐ給ふ事なくとも、是をすへの世までの子共につたへ給ふべし、いでこん人のうちに、もし百人が中ににても、これをもちゐ給人ありて、さてはむかしの人のつたへ給ひけるかと、おもひ給人やおはしますとて申也、人の親は子にあひぬれば、をこがましき事のあると申候、是やらんとおぼゆるとおもひたまはんすれども、心靜に二三人もよりあひ御らんすべし、たゞしかやうに申事は、わがおやの我をけうくんするばかりと思ひ給ふべからず、すへの世の人をけうくんすると心え給ふべし、返々おかしくつゝ、ましき事なれば、他人にもらし給ふべからず、いにしへの人のかたみと是を見て一こゑ南無と唱給へよ、御教訓の御狀かくのごとし、

〔竹馬抄〕

治部大輔義將朝臣

よろづのことに、おほやけすがたといふと、眼といふことの侍るべき也、このごろの人おほくは、それまで思ひわけて、心がけたる人すくなく侍る也、まづ弓箭とりといふは、わが身のこと、は申におよばず、子孫の名をおもひて、振舞べき也、かぎりある命をおしみて、永代うき名をとるべからず、さればとて、二なき命をちりはいのごとくにおもひて、死まじき時、身をうしなふ